

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 6 月 11 日現在

機関番号：12613

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2012～2014

課題番号：24520083

研究課題名(和文)『百科全書』地理項目の典拠の探求：事典類を中心に

研究課題名(英文) Research into the sources of the geographical articles of the "Encyclopedie":
focused on dictionaries

研究代表者

小関 武史 (KOSEKI, Takeshi)

一橋大学・大学院法学研究科・教授

研究者番号：70313450

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,100,000円

研究成果の概要(和文)：『百科全書』の地理項目の執筆者は、巻を追うごとにディドロ、匿名執筆者、ジョクールへと交替している。ディドロは、ヴォジヤン『携帯地理事典』、ブリュザン『地理大事典』、『トレヴー事典』、モレリ『歴史大事典』、サヴァリー『通商事典』を自在に活用した。同じ傾向が無署名項目にも認められるため、それらはディドロが匿名で書いたと推察される。一方、ジョクールの典拠については未解明の部分が多く、上記五つの辞典のうち、『地理大事典』だけが参照された可能性を残すにとどまる。

研究成果の概要(英文)：Authors on the articles of the Encyclopedie concerning geography varies from volume to volume. We recognize three groups: Diderot's articles, those of anonymous author and of Jaucourt. To compose his articles, Diderot uses freely five dictionaries, that is to say, Vosgien's "Dictionnaire géographique portatif", Bruzen's "Grand Dictionnaire géographique", "Dictionnaire de Trevoux", Moreri's "Grand Dictionnaire historique" and Savary's "Dictionnaire de commerce". We find same tendency in the unsigned articles as for sources, so that these articles of second group can be regarded as written by Diderot. However, Jaucourt's sources remain obscure. Only Bruzen's Dictionary could be consulted by this contributor.

研究分野：18世紀フランス思想史

キーワード：『百科全書』 地理 典拠 事典 ディドロ ジョクール ヴォジヤン ブリュザン・ド・ラ・マルテ
イニエール

1. 研究開始当初の背景

(1) 『百科全書』(1751-1765年、文章篇17巻+図版篇11巻、補遺を除く)は、18世紀フランス啓蒙思想の金字塔と目されている。その評価に誤りはないが、『百科全書』に収録された項目がごとく執筆者独自の知見を盛り込んだものというわけではない。それどころか、大規模な剽窃によって成立した書物であるが、大半の項目において、執筆者は自らの典拠を明示していない。以前はその点に関する認識が乏しかったが、1960年代に入り、ジャック・プルーストやジョン・ラフが実証的な『百科全書』研究の道を切り開き、項目の典拠についての研究が蓄積されるようになった。

(2) 研究代表者は『百科全書』の東洋観に注目した研究を進めてきたが、上で触れたような研究動向に鑑みて、東洋関係項目についても執筆者の典拠を究明することを目指した。調査を積み重ねる過程で、『百科全書』に先行する事典類が貴重な情報源になっているという感触を得た。こうした調査の範囲を東洋関係の項目に限定することなく全面的に展開すれば、『百科全書』の本文成立過程の重要な一局面が明らかになる。そこで、まずは数において『百科全書』で最大規模を誇る地理関係項目について、先行する事典類との比較照合を行おうと考えた。

2. 研究の目的

(1) 本研究の目的は、『百科全書』地理関係項目の隠された典拠を個々の事例に即して具体的に明らかにすることである。『百科全書』と先行諸文献との綿密な照合を通じて典拠を発掘することにより、『百科全書』の本文成立過程の一端を明らかにする。また、典拠の選定の仕方、文章の改変の仕方に注目することで、『百科全書』の項目執筆者の独自性がどこにあるかを示す。

(2) 『百科全書』が参照した文献は多岐にわたるが、事典類(総合事典および専門事典)を対象として本研究を行う。『百科全書』の地理項目の一つ一つをこれら事典類の記述と照合し、どれが真の典拠として活用されたかを明らかにする作業を積み重ねる。その蓄積の果てに、『百科全書』全7万項目中約20パーセントを占める地理項目の典拠を一覧で示すことができる。

3. 研究の方法

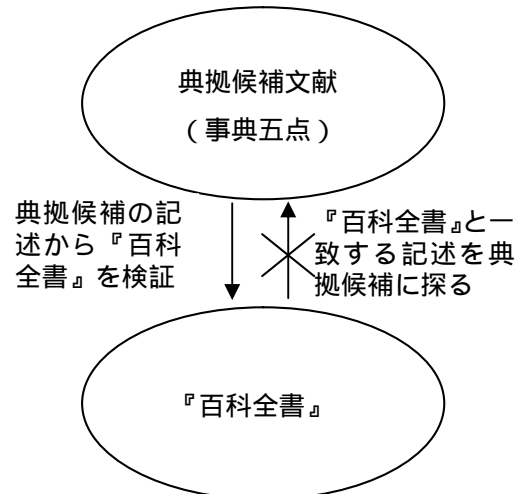
(1) 『百科全書』の地理関係項目の典拠候補として、研究代表者は次の五つの事典に注目した。出版年まで示したのは、版による異同が無視できないからである。版の特定まで進めて、ようやく典拠として確定することになる。

ヴォジヤン『携帯地理事典』1749年版(八折1巻)

ブリュザン・ド・ラ・マルティニエール『地理大事典』1739-1741年版(二折6巻)
 『トレヴー事典』1743年版(二折6巻)
 同1752年版(二折7巻)
 モレリ『歴史大事典』1732年版(二折6巻)
 サヴァリー『通商事典』1748年版(二折3巻)

これらの文献を、順次国内外の図書館で見出し、必要箇所をデータベース化したうえで、『百科全書』の地理項目と比較照合する。この作業を通じて、個々の事例について典拠として利用された可能性が高い文献を特定し、項目執筆者の関与の内実を明らかにする。

(2) 具体的には、これら五つの事典を順次取り上げて、そのそれぞれについて1ページ目から順に丹念に辿り、『百科全書』の地理項目の記述を包摂しているかどうかを確認してゆく。『百科全書』から典拠にさかのぼるのではなく、典拠候補の文献から『百科全書』へという生成の流れに沿うのである。両者は似て非なる方法である。



4. 研究成果

三年間の研究期間を通じて、上記3で記した方法に従って、段階を踏んで典拠調査を遂行した。そうして得られた研究成果を年度ごとに記し、最後に全体を総括する。

(1) 平成24年度には、ヴォジヤン『携帯地理事典』1749年版およびブリュザン・ド・ラ・マルティニエール『地理大事典』1739-1741年版について、調査を実施した。

第一の文献(ヴォジヤン)の調査により、初期段階においてディドロがとくにヴォジヤンを利用しているという仮説(参考文献)は、かなりの程度まで実証された。しかし、『百科全書』と『携帯地理事典』1749年版に含まれる地理項目が、見出し語のレベルで完全に一致しているわけではない。『携帯地理事典』所収の項目が『百科全書』に取り入れられていないケースも散見される。その法則性については、他の文献をさらに綿密に

検討しない限り、断定的なことが言えない。

第二の文献(ブリュザン)は、「大事典」を名乗るだけのことはあり、項目の数が非常に多いのに、記述が非常に詳細に及んでいる。それらは『百科全書』の地理項目の内容をカバーしているとはいえ、直接の典拠として参照されたとは断じるには不十分であるという印象を受けた。つまり、ブリュザンと『百科全書』の間に他の文献が介在している可能性が高いように思われた。

(2) 平成 25 年度には、『トレヴー事典』1743 年版および 1752 年版、モレリ『歴史大事典』1732 年版という二種の事典(書目としては二種だが、版本としては三種)について、調査を実施した。

第一(通算第三)の文献(『トレヴー』)は、単に地理の分野にとどまらず、幅広く『百科全書』の項目執筆者によって活用されている。しかし、その利用の仕方は必ずしも網羅的とは言えず、『百科全書』がいかなる基準に基づいて『トレヴー事典』の項目を取捨選択したのか、明確ではない。地理関係項目以外の利用実態も調べてみたが、決定的な仮説を構築するには至っていない。

第二(通算第四)の文献(モレリ)は、歴史を主要なテーマとする事典であるが、地名の記述も豊富に含んでいる。ある段階で、この事典に収録された項目が『百科全書』に取り込まれた形跡をたどることはできたものの、全体としてみれば、むしろモレリは『百科全書』地理項目の主要な典拠ではないらしいという手応えを得た。

(3) 平成 26 年度にはサヴァリーの『通商辞典』1748 年版(『百科全書』刊行時における最新版)の調査を行った。『百科全書』はこの文献を幅広く活用しており、その範囲は通商関係の項目にとどまらない。地名を掲げて世界各地の通商実態を述べた記述については、その地名を見出し語に取り込む形で、主としてディドロが『百科全書』の初期の数巻で利用していることが明確になった。しかし、こうした利用実態は、あくまでも初期に限られる。後半の諸巻で地理関係項目を担ったジョクールの、サヴァリーの活用に積極的ではない。

(4) 全期間を通じた研究で明らかになったことだが、『百科全書』の地理項目の典拠は、前半と後半とで大いに異なっている。それは地理項目の担当者がディドロからジョクールに交代したことに関係しており、その境界は第 7 巻辺りに認められる。

この研究課題で調査した文献は、もっぱらディドロが書いた項目にとっての典拠であることが判明した。明確にディドロの署名が付された地理項目と、無署名の地理項目では、典拠群に共通性が見られる。ディドロが複数の典拠をどのように使い分けたかという点

までは解明できなかったものの、複数の典拠を自在に使い分けたという事実によって、第 2 巻以降に急増する無署名地理項目がディドロによって執筆されたという仮説は、説得力を増したと言えよう。

一方で、ジョクールの担当部分については、未解明の部分がおおく残された。現段階で言えるのは、ヴォジヤン『携帯地理事典』、『トレヴー事典』、モレリ『歴史大事典』、サヴァリー『通商事典』の四点がジョクールの典拠ではないということである。ブリュザン・ド・ラ・マルティニエール『地理大事典』については、ジョクールの記述と一致する点が多いが、断定するには若干の疑問点が解消されずに残されている。たとえば、双方の地名の表記にずれがあったり、ブリュザンには見当たらない情報がジョクール執筆項目に混じっていたりする。また、ジョクールの一般的傾向として、簡便にまとめられた文章をそのまま(ほとんど手を加えず)写して項目に仕立てることが挙げられるが、ブリュザンのような詳細な記述は、必ずしもその方法に適しているとは言えない。要するに、ブリュザンをふまえた別典拠の存在を排除することができないのである。そうした文献が存在するのかどうか、その探求が今後の主たる課題である。

参考文献

小関武史、『百科全書』地理項目の典拠を求めて ディドロによる四つの事典の利用、『百科全書』・啓蒙研究論集、査読有、第 1 号、2012、95-114

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 3 件)

小関武史、地名学から自然地理学へ 18 世紀フランスの辞典類はどのような地理知識を伝えようとしていたか、『百科全書』・啓蒙研究論集、査読有、第 3 号、2015、61-79

Alexandre Guilbaud, Irène Passeron, Marie Leca-Tsiomis, Olivier Ferret, Vincent Barrellon, Yoichi Sumi, Tatsuo Hemmi, Takeshi Koseki, Hisashi Ida, « Entrer dans la forteresse » : pour une édition numérique collaborative et critique de l'*Encyclopédie* (projet ENCCRE), *Recherches sur Diderot et sur l'Encyclopédie*, 査読有, No.48, 2013, 225-261

Takeshi Koseki, Comment passer des récits de voyages au dictionnaire encyclopédique? Quelques remarques sur le *Recueil d'observations curieuses* (1749) de Claude-François Lambert, *Recueil d'études sur l'Encyclopédie et les Lumières*, 査読有, No.2, 2013, 95-114

〔学会発表〕(計3件)

小関武史、地理辞典はどのような知識を伝えようとしていたか?、『百科全書』・啓蒙研究会、2014年3月29日、慶應義塾大学(東京都港区)

Takeshi Koseki, Comment passer des récits de voyages au dictionnaire encyclopédique? Quelques remarques sur le *Recueil d'observations curieuses* (1749) de Claude-François Lambert, Colloque international (Chantiers des Lumières : *L'Encyclopédie* à l'âge de la numérisation, 2013年3月29日, Paris (France) (デイドロ生誕300年記念シンポジウムに招待され、半年前に東京で行った下記 の口頭発表を再演してほしいという要請を受けて行った発表。)

Takeshi Koseki, Comment passer des récits de voyages au dictionnaire encyclopédique? Quelques remarques sur le *Recueil d'observations curieuses* (1749) de Claude-François Lambert, Colloque franco-japonais sur les Lumières et sur *l'Encyclopédie*, 2012年9月29日, 慶應義塾大学(東京都港区)

〔図書〕(計1件)

石川文康、井川義次、小関武史、高橋輝暁、堀池信夫、菊地章太、岡野薫、中島隆博、明治書院、知は東から 西洋近代哲学とアジア(『シリーズ 知のユーラシア』第1巻)、2013、214(67-90)

6. 研究組織

(1)研究代表者

小関 武史(KOSEKI, Takeshi)

一橋大学・大学院法学研究科・教授

研究者番号: 70313450